

## 前期読本作家都賀庭鐘の中国白話小説への利用法について

大連海洋大学 顔景義

Yan JingYi

**Research on the creative Techniques of Earlier yomihon writer Tuga Teisyou under the influence of fiction in vernacular Chinese**

中国白話小説の日本への輸入は、日本の中世末期と近世初期から始まった。江戸時代、当時の唐話学流行に応じて、都賀庭鐘は中国の短編白話小説集「三言」などに因んで、『英草紙』(1749)、『繁野話』(1766)などを刊行している。読本の嚆矢というべき『英草子』は9篇からなるが、その中の8篇が「三言」を忠実に用いている。『繁野話』も「三言」を多少とも翻案している。都賀庭鐘が中国白話小説を翻案する際の取り入れ方はそれぞれ違うのである。まずは、忠実に翻案している傾向が顕著である。原話を逐字訳したのもあれば、趣向を脱化したものもあり、着想だけ借用する多種多様なもの等がある。それに、取捨選択しつつ、換骨奪胎の所も多少見られる。

本稿では、『英草紙』『繁野話』の作品と原話となる「三言」の作品の比較を試みたいが、まず両者の話の概要を把握したうえで、作品の趣向構成を対比しながら、都賀庭鐘の中国白話小説への利用法を探究してみた。

キーワード：都賀庭鐘、白話小説、利用法、踏襲、改編

**1. はじめに**

読本とは、江戸時代の小説の一種で、絵を中心とする草双紙に対して「文を読む本」という意味で、文章を中心とする文学の一ジャンルである。時代的に前期読本と後期読本とに分けられる。前期読本は、寛延～天明(1748～1789)期に上方で行われたもので、中国の白話小説を翻案したものが多く、中国文学からの影響が色濃く残っている。都賀庭鐘の『英草紙』、『繁野話』などがその代表作である。寛延二(1749)年刊行された『英草紙』は、全書、9編の中で、8編が中国の白話小説を基に翻案している。内容、筋立て、表現などにおいて、従来の浮世草子、八文字屋本と違って、日本の読本小説の元祖と称する。『英草紙』に続いて、庭鐘の『繁野話』も「三言」を主とする中国の白話小説を多少とも翻案している。それについて、麻生磯次氏は「中国文学の影響で、惰性に流れている小説壇に一脈の新鮮味を吹き込むことを得たのは、全く中国文学のお蔭であると言っても差支えなかったのである」<sup>1)</sup>と評している。つまり、それまでの風俗や人情を主題とする「浮世草子」の惰性に甘んじていた当時の文壇に新風をもたらしたのである。

本稿では、『英草子』第4話の「黒川源太主山に入って道を得たる話」(以下「源太主」と略記)と『警世通言』第2巻の「莊子休鼓盆成大道」(以下「莊子休」と略記)との比較、『英草紙』の第5話「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」(以下「紀任重」と略記)と『諭世明言』第31巻の「閻陰司司馬貌断獄」(以下「司馬貌」と略記)との比較、『英草紙』第8話の「白

水翁が売卜直言奇を示す話」(以下「白水翁」と略記)は、『警世通言』巻13の「三現身包竜図断冤案」(以下「包竜図」と略記)との比較、『繁野話』第5話の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」(以下「白菊の方」と略記)、『諭世明言』の第20巻「陳從善梅嶺失渾家」(以下「陳從善」と略記)との比較を通して、都賀庭鐘の中国白話小説への利用法の真相を探ってみたいと思う。

## 2. 『警世通言』「莊子休」と『英草子』「源太主」

### 2.1 「莊子休」と「源太主」の梗概

#### (1) 「莊子休」の梗概

中国の周の末頃、大聖人老子に師事していた莊子は、漆園吏を辞め、妻田氏と斉国に隠棲していたが、ある日、突然病を起こして死ぬ。生前夫に固い貞節ぶりを見せていた田氏は、莊子を訪ねて来た弟子楚王孫にすぐ心移し、再嫁の望みを伝える。楚王孫が棺を下屋に移せとか、薬効のために莊子の脳髓を取れなど、さまざまな難題をもちかけると、田氏はそれに従おうとして、斧で棺を開けたとたん、莊子が生き返る。すべては隠形分身の術を用いて、楚王孫と老蒼頭に姿を変え、田氏を試したのだと告げる。田氏は恥じて自ら死ぬ。

#### (2) 「源太主」の梗概

天文年中、黒川源太主という道術の達人は、金花山の山奥深く妻の深谷と世を避けて暮らしていたが、色欲に養生の術が敗れて死ぬ。生前二夫にまみえない約束をしていた妻深谷は、源太主の弟子二万道竜に心移し、四十九日のうちに再嫁の望みを告げる。道竜が棺を下屋に移せとか、薬効のために源太主の脳髓を取れなど、さまざまな難題をもちかけると、深谷はそれに従おうとして、棺を開けると、源太主が姿を現し、すべては隠形分身の術を用いて道竜に姿を変え、深谷を試したのだと告げる。深谷は恥じてみずから死ぬ。

### 2.2 「源太主」の原話の踏襲

「源太主」において、原話「莊子休」の主筋や構成をそのまま受け入れただけでなく、原話を引用した例も少なくない。例えば、冒頭文の「夫妻を同林鳥と喩える」とか、結末の詩句は「莊子休」の語句をそのまま用いているのである。

#### (1) 「莊子休」と「源太主」の冒頭文

##### ① 「莊子休」の冒頭文

若論到夫婦、雖說是紅線纏腰、赤繩系足、到底是剝肉粘膚、可離可合。常言又說得好：「夫妻本是同林鳥、巴到天明各自飛」<sup>2)</sup>。

##### ② 「源太主」の冒頭文

夫婦の間は是にかはり、天合にあらず、義合にて、他人と他人がわたくしに約束して、寄り集りしものなれば、義理と信をのけては何も無きもの也。相義して合ひ、又相義して離るる事あり。離るる時は他人よりも疎し。諺に云ふ、夫妻本是同林鳥、巴到天明各自飛<sup>3)</sup>。

上掲の「莊子休」と「源太主」の冒頭文を比較してみると、両作品の冒頭文では夫婦は義理の関係で結ばれているため、婦人のことに気をかけないと不義になるという女性観を表明し、単刀直入に教訓じみた主題論に入る構成になっている。

## (2) 「莊子休」と「源太主」の結末の詩句

### ① 「莊子休」の結末の詩句

庄生歌罢，又吟诗四句：

你死我必埋，我死你必嫁。我若真个死，一場大笑話！

庄生大笑，将瓦盆打碎。取火從草堂放起，屋宇俱焚，連棺木化为灰燼<sup>2)</sup>。（「莊子休」）

### ② 「源太主」の結末の詩句

又一頌を作つて曰く、

爾死我必埋、我死爾必嫁。我若真個死、一場大笑話。

源太主手を鞞つて大にわらひ、庵に火をさして、棺と共に灰燼となし<sup>3)</sup>。（「源太主」）

上掲の「莊子休」と「源太主」の結末の詩句を比較してみると、ほぼ同じである。ほかに「莊子休」の文章を逐字的に和訳したところも数多くある。初期読本の原典を忠実に模倣する特徴がはっきり表れている。独創性を重んじられる後期読本にはこのような措辞用語の長い引用文はあまり見られない。

## 2.3 「源太主」の趣向の脱化

人物設定において、「源太主」は莊子休を黒川源太主に、その妻田氏を深谷に、その師李伯陽を秋風道人に、その弟子楚王孫を二万道竜にと、それぞれ転換させている。

以下は莊子休と黒川源太主、楚王孫と二万道竜を二つに分けて考えてみよう。

### (1) 莊子休と黒川源太主

「莊子休」の主人公は、周の末の宋の国の賢人莊周で、つまり有名な「胡蝶の夢」の説話を作つた莊子のことである。莊子休は道教の祖の老子を師として「清淨無為」の思想を唱えた人である。「源太主」の主人公は、羽州象瀉（山形県由利郡象瀉町）の黒川源太主という人となっている。その師の秋風道人は『本朝神社考』六に見られる人物で、江戸初期の林羅山と同時代の人で、長寿の者と記されている。源太主は秋風道人の長生の術を学んで、何事でもゆっくりと構え、好き嫌いの感情に動かされない性格である。「女色をも親しまず遠ざけず」と記されているが、後に「色慾に心長じ、養生の術破れ」の記述を比べてみると、源太主はごく普通の好色の人と変わらない凡俗的なイメージに造型されている。これは原話の超然とした莊子休のイメージとは大分違っている。もう一つは、この段で莊子休は分身隱形術の超能力を身に付けていることを物語の初めの部分で伏線として描いている。後の墓の土を扇子で一瞬にして乾かしてしまう部分と、最後の妻の真偽を試すために一旦死んで再び生き返るという超能力の発揮の部分などの一連の構想と首尾暗合している。この伏線の設置によって、「莊子休」のストーリー展開は更に自然な感じがするのである。それに対し、「源太主」では長生の術に長ける源太主が、物語の後半にいきなり「分身隱形」の術を使い出すという展開は小説の流れとして、やや唐突感がしないでもない。

### (2) 楚王孫と二万道竜

「莊子休」において、莊子休が死ぬ前に、まだ面会していない弟子と約束があるが、その弟子は楚の国の王孫で、間もなく訪ねてくると言う。莊子が死んだ後に、弟子の楚王孫が約束通りに訪ねてくる。この場面は「源太主」には見当たらない。楚王孫に当たる人物は、もともと源太主の養生の術を学ぶ弟子の二万道竜である。源太主が重病になった後、妻の深谷

が源太主の弟子の医師である道竜を呼んできて、治療を施してもらうという趣向になっている。「莊子休」では、田氏が楚王孫に一目惚れしてしまう構想は、多少物語のながれとして不自然な感じがする。それに対して、「源太主」では、深谷の道竜への愛は、道竜が源太主の治療や葬儀を手伝ってもらううちに、次第に生まれてきたものである。この部分において、「源太主」の方はもっと自然な流れになっている。この改変から都賀庭鐘の原話利用の柔軟な翻案手法と独自の創意が見て取れる。

つまり、『英草紙』の「黒川源太主」は、原話の『警世通言』の「莊子休」の主筋をそのまま踏襲しているのみならず、措辞構成の上でも原話をそのまま和訳した内容も多い。従って、「莊子休」の「分身隠形術」などの怪異的な要素も「黒川源太主」に見られる。そういう原話を忠実に模倣踏襲する特徴は『英草紙』の「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」や、前期読本の代表作『雨月物語』の「蛇性の姪」等にもよく見られる。しかし、翻案は翻訳ではない。翻案文学には作者の独創性が伴わないといけないのである。初期読本の『英草紙』の「源太主」は、原話『警世通言』第2巻「莊子休」を用いながら、独自の創意を付け加え、趣向や場面や人物造型には様々な工夫を凝らし、取捨選択しつつ、換骨奪胎の所も多少見られる。そこにはやはり中国原話を用いた翻案小説としての読本の道を切り開いた開拓者の都賀庭鐘の渾身の努力が存分に感じられるのである。

### 3. 『喻世明言』「司馬貌」と『英草子』「紀任重」

『英草紙』の第5話「紀任重」では、輪廻転生の趣向を生かして作者の史論を展開させている。「紀任重」は貧乏学者の紀任重が閻魔のかわりに裁判を執り行い、百年間裁定が付かないでいる源頼朝、義経、畠山重忠らの源平合戦時代の訴訟を取り上げ、明快な判決を下して、一同を護良親王、新田義貞、足利尊氏らの南北朝時代の人物に転生させるという話で、馮夢龍作『喻世明言』第31巻の「司馬貌」の内容を日本風書き換えたものである。原話「司馬貌」において、不遇な文人司馬貌は、冥界で三百五十年の間決着が付かないでいる韓信、劉邦、項羽らの漢楚戦争時代の訴訟を取り上げ、明快な判決を下して、一同を獻帝・曹操・関羽らの三国時代の人物に転生させる構成になっているが、内容は前世の恨みを現世で応酬したり、前世の悪行が現世でその報いを受けたりする話で、物語全体の構想は復讐譚に仕立てた小説である。

#### 3.1 「紀任重」の原話の措辞の踏襲

「司馬貌」と「紀任重」の主筋を見ると、殆ど一致しているのである。物語の展開において、裁断の部分を除いて、「紀任重」では、原話「司馬貌」の措辞用語と趣向をそのまま踏襲したものが、次のように多く見られる。

① 頭文で運命を嘆いている名言語句である。

仮如命中所有，自然不求而至；若命里没有，枉自劳神<sup>4)</sup>。 (「司馬貌」)  
 命の裡にある事は、求めずして自然に至る。命の裡に無きことは、精神を勞しても至らずと知るべし<sup>3)</sup>。 (「紀任重」)

② 司馬貌と紀任重の不平不満を言う語句である。

胸無一物兮，囊有余資。富者乘雲兮，貧者墮泥。賢愚顛倒兮<sup>4)</sup>。 (「司馬貌」)

胸むねに一物いちもつなけれども、囊ふくろに余あまるたから賞とあり。富とめるは雲くもにのり、貧まづしきは泥どろおつ、賢かしこ愚おろかなる、その位くらゐを顛倒てんたうする<sup>3)</sup>。 (「紀任重」)

③天帝の命令の言葉である。

上帝有旨。將閻羅王位權借你六個時辰，容放告理獄。若斷得公明，還你来生之富貴；倘無才判問，永墮酆都地獄，不得人身<sup>4)</sup>。 (「司馬貌」)

上帝の旨あり。此の閻羅、王位を六個時辰 爾に替らしめ、告を放れて決断せしめ、断明白ならば、爾来世富貴を得ん。裁判する事あたはざる時は、永く地獄に落ちて、人身を得ざるべし<sup>3)</sup>。 (「紀任重」)

④司馬貌と紀任重の訴訟を見た後の反応を描いた措辞である。

重湘覽畢，呵呵大笑道：“恁様大事，如何反不問決？你們六曹吏司，都該究罪。這都是向來閻君因循耽擱之故，寡人今夜都与你判断明白<sup>4)</sup>。” (「司馬貌」)

任重覽畢つて、呵々として大に笑ひ、「是程の大事、如何ぞ極め決せず、果して、陰司決断滞けつだんとどこほるにあらずや。今夜都べて判断して、一々明白いぢいちめいならしめん」と<sup>2)</sup>。 (「紀任重」)

以上の内容の多くは、司馬貌の陰司断獄に関わっているものである。場所は天国と地獄であり、人物は天帝、閻魔などの神様を登場させている。都賀庭鐘は「司馬貌」の怪談の色彩に惹き付けられ、それに関する内容をそのまま「紀任重」に取り入れたのではないかと思われる。

### 3.2 冤罪を訴える趣向の踏襲

「紀任重」では、原話の「司馬貌」の断案の部分踏襲した部分が見られる。例えば、原話の韓信の訴える趣向を、次のように「紀任重」の義経の訴える趣向に置き換えている。

(韓信)：“有一算命先生許復，算我有七十二歲之寿，功名善終，所以不忍背漢。誰知天亡，只有三十二歲。”(中略)許復道：“閻君听稟：常言‘人有可延之寿，亦有可折之寿’，所以星家偏有寿命難定。韓信應該七十二歲，是据理推算。何期他殺機太深，虧損陰騭，以致短折。非某推算無准也<sup>4)</sup>。” (「司馬貌」)

(義経)：“余童形の時、洛に吉岡鬼一法眼といふものありて、(中略)曾て某を相して、寿七十一歳功名榮貴に終ると云へり。是ゆゑに天道に任せて、人の心に佞らず。誰か知らん、零落千磨僅に年三十一歳、。(中略)鬼一云ふ、「人の寿命延ぶべきあり、折くべきあり。星学者流常に寿命の定め難きは是の故なり。義経七十一歳、是算上の理の拠るところ、かなしきかな、彼が機を殺す事太だ深く、陰陽を損ずる事多きが故に、短折をいたす。某算命の違ふに非ず。<sup>2)</sup>” (「紀任重」)

上掲文のように、「紀任重」は「司馬貌」の相士によって寿命を推算する趣向はほぼ同じである。都賀庭鐘は「司馬貌」のこのような趣向に引かれて、原話の神秘的な趣向を忠実に踏襲したように思われる。

### 3.3 韓信(義経)復讐譚の改変

都賀庭鐘は、原話の物語の中心となる訴訟を、「紀任重」において、日本の史実に合わせながら改変している。つまり、「司馬貌」では、中国史上の楚漢戦争の人物たちを三国時代に転

生させたが、「紀任重」では、日本史上の源平合戦の人物たちを南北朝の時代に生まれ変わらせたのである。

「司馬貌」の訴訟は四件で、つまり、①屈殺忠臣事、②恩将仇報事、③専権奪位事、④乗危逼命事である。中心となる部分は①である。

韓信は漢の天下統一に大功を立てたが、かえって劉邦によってその官爵を奪われ、呂后・蕭何によって謀殺されたと訴える。これに関し、韓信の軍師である蒯通が途中で韓信を見捨てたこと、占師の許復が韓信の寿命 32 歳を 72 歳と占い誤ったこと、蕭何が韓信を劉邦の大將として推薦しながら後にその命を奪ったことが、それぞれ訴えられる。蒯通は韓信がその計略を採用しなかったと言い、許復は韓信の悪行のため寿命を縮めたと言い、蕭何は劉邦・呂后の強制でやむなく韓信を殺したのだと言う。司馬貌は、韓信の死はすべて劉邦の誤りによると判断する。彭越は、呂后に言い寄られたが従わなかったため、惨殺されたと訴える。司馬貌は、それが真実であると認める。英布は、彭越の肉を食わされたのを怒って、呂后の使者を斬ったため、呂后に自殺を命じられたと訴える。司馬貌は、韓信・彭越・英布に漢の天下を三分して与えるという。

それに対して、「紀任重」の訴訟は三件になっている。つまり、(ア) 幼を欺きて令入水告事、(イ) 功を賞せず骨肉を傷ふ告事、(ウ) 功臣を忌みて家を令断絶告事の三件である。中心となる部分は(イ)の部分である。

源義経は、源氏再興に大功を立てながら、かえって源頼朝に殺されてしまったと訴える。これに関して、義経の軍師である江田源三が途中で義経を捨てたこと、吉岡鬼一法眼が 31 歳で終わる義経の寿命を 71 歳までと占い誤ったこと、大江広元が頼朝・義経の兄弟仲を裂いたことによって、それぞれ訴えられる。江田源三は義経がその諫言を聞き入れなかったと言い、吉岡法眼は義経の悪行が寿命を縮めたと言い、大江広元は義経が功に誇って自ら災を招いたと答える。任重は、義経の死は、結局頼朝の罪であると判断する。範頼の訴えは、義経と同意であるから、別に審問されない。

上記の対照を検討してみると、「司馬貌」と「紀任重」との間に、大きな相違点があると思われる。「司馬貌」で、訴訟の中心人物である韓信が、生前の功勞によって、三国の中でもっとも強大な魏の曹操に転生している。「紀任重」では、韓信に相当する源平台戦の中心人物である源義経は、新田義貞に生まれ変わっている。しかし、新田義貞は南朝側の大将として、南北朝の対立においては敗北する運命にある者であり、前世における義経の無念を晴らすことは出来ない設定になっている。

日本の南北朝対立の時代に曹操に当る人物がいないことから、都賀庭鐘は、源義経を新田義貞に転生させている。このような転生関係を実現するために、都賀庭鐘は原話の内容を巧みに利用している。「司馬貌」では、占師の許復は韓信の寿命が四十年縮められた理由を四点述べている。それがみな武將としての進退から生じた戦術・戦略上の公的側面の史実事件である。「紀任重」では吉岡鬼一も、義経の寿命が四十年縮められた理由として、①一途な女心を裏切ったこと、②国母を犯したこと、③不義を忘れ、兄を追討する後白河法皇の命令を受けたこと、④数多くの人を殺すことを挙げている。①と②は、まったく私的分野に属する行為であり、③も「兄」への反逆に重点が置かれている。三つとも史実に裏付けられない事件である。都賀庭鐘は原話の構造を踏襲しながら、寿命が縮められた事件の内容を公的側面か

ら私的側面に改変している。いわば私的側面から、義経の不義が問われていると言えるのであろう。紀任重は、義経の不義によって、「儼身命を惜まず家の仇を討ち、君の宸襟を安んず功勞ありて志を得ず。然れども不議の行跡多く、陰徳を損ずる事あり。(中略)終を能くせざるは、前生不議の罪の報ふ所。」と判決を下る。

義経伝説上、義経が衣川を逃がれて、念仏行者・教信、蝦夷王、成吉思汗などになったという英雄不死伝説は多様な発展を遂げているが、「紀任重」においては転生物語はあまり発展していない。やはり不運の英雄たる生きざまに同情と敬意を払っていることに読者の共鳴を得たかったのではないかと思われる。

都賀庭鐘は、「司馬貌」を翻案する際、多様な工夫を凝らしていることが明らかである。都賀庭鐘は、前期読本の「原話忠実」の特徴を生かしながら、「司馬貌」の史事と怪異の世界を結合した作品の手法に引かれながら、巧みに日本風に改作している。「紀任重」においても、都賀庭鐘は原話「司馬貌」を忠実に踏襲しながらも、日本の歴史や国情、及び日本人の趣味趣向に符合するように、取捨選択をしながら、読本としての面白みを自己薬籠中の如く作り上げている。「司馬貌」の楚漢戦争の英傑を三国時代に転生させることを怪異の冥界で可能にし、冤罪を晴らすという痛快な物語になっているのに対し、「紀任重」では源平合戦の英傑を異界で南北朝時代に転生させることで、不運の英雄らに対する日本人の憐れみと敬意の心を慰める効果があったのではないかと思われる。

#### 4. 『警世通言』「包竜図」と『英草子』「白水翁」

##### 4.1 「包竜図」と「白水翁」の梗概

###### (1) 「包竜図」の梗概

兗州府奉符県の押司の孫文は、相士李傑から、今日の三更、三点、子の時に死ぬと言われた。果たして、その時刻に妻と下女迎児を目の前に、面を覆って走り出て河に身を投げた。のち夫人は亡夫の同僚で同姓の小孫と呼ばれた男を夫として迎える。その後、孫文が下女の迎児の前に三回現れて恨みを晴らしてくれと言った。この頃、奉符県の知県に赴任してきた包拯の前にも現れ、恨みを晴らしてくれと孫文は訴えていた。包拯が調査に乗り出し、迎児を呼んで事情を聴き、事件は解明した。夫人がかねてより小孫と通じており、相士の言葉を利用して小孫と謀り、夫を殺して台所の井戸に埋め、小孫は芝居をして迎児の目の前で面を覆って走り出て、河に石を投げて投身に見せかけたものであった。

###### (2) 「白水翁」の梗概

室町時代の頃、郡代の出張所勤めを拜命している茅淳官平が売卦の白水翁にその日の三更子時(深夜0時から2時頃)死ぬと言われた。茅淳は、三更子時に寝室から飛び出し、海に近い水中に飛び込んだのである。百日の後、権藤太という、官平とも平常交際している人が茅淳の家に婿入りして相続したいと申し出る。そこで、小瀬は権藤太を入れて官平と改名させた。その後、茅淳が下女の安の前に二回現れて恨みを晴らしてくれと頼んだ。一方、和泉国の殿様もある夜、絞殺された人が願いの書状を奉った夢を見た。殿様は官平夫婦を裁きの場へ呼び出し、一方数人の者を官平の家に派遣して、かまどを壊させた。先の官平の死体が発見された。これを見て、もとの権藤太も白状し、密通して夫を殺した妻の小瀬と商人の官平の二人の罪人は死罪との裁きを受けた。

#### 4.2 「白水翁」の原話の抄訳

前にも述べたように、前期読本には「原典忠実」といった特徴がある。「白水翁」も「源太主」、「紀任重」と同様に、原話の措辞用語を逐字的に和訳したところも多くある。例えば、以下の官平が「卦を問う段」についての記述は、「包竜図」の措辞用語を次のように、そのまま和訳している。

先生道、「実不敢瞞，主尊官当死。」又問，「却是我幾年上当先」。先生道，「今年死。」又問，「却是今年几月死。」先生道，「今年今月死。」又問，「却是今年今月几日死。」先生道，「今年今月今日死。」再問，「早晚時辰。」先生道，「今年今月今日三更三点子時当死。」押司道，「若今夜真个死，万事全休。若不死，明日和你県里理会。」先生道，「今夜不死，尊官明日来取下這斬無学同声的劍，斬了小子頭。」<sup>2)</sup> (「包竜図」)

翁もとより言葉<sup>ことば</sup>を飾<sup>かざ</sup>らず、「拙道<sup>せつたう</sup>が卦<sup>くわ</sup>による時<sup>とき</sup>は、貴君<sup>きくん</sup>当<sup>まさ</sup>に死<sup>し</sup>し給<sup>たま</sup>ふべし。此の士<sup>し</sup>いふ、「人<sup>ひと</sup>死<sup>し</sup>せざる道理<sup>だうり</sup>なし。我<sup>われ</sup>幾年<sup>いくねん</sup>の後<sup>のち</sup>か死<sup>し</sup>すべき。翁<sup>おん</sup>云<sup>い</sup>ふ、「今年<sup>こんねん</sup>死<sup>し</sup>し給<sup>たま</sup>はん。今年<sup>こんねん</sup>の中<sup>うち</sup>、幾<sup>いく</sup>の月<sup>つき</sup>に死<sup>し</sup>すべき。今年<sup>こんねん</sup>の今<sup>いま</sup>月<sup>つき</sup>死<sup>し</sup>に給<sup>たま</sup>はん。今年<sup>こんねん</sup>今<sup>いま</sup>月<sup>つき</sup>幾<sup>いく</sup>日<sup>か</sup>に死<sup>し</sup>するや。今年<sup>こんねん</sup>今<sup>いま</sup>月<sup>つき</sup>今日<sup>こんにち</sup>死<sup>し</sup>に給<sup>たま</sup>ふべし。此<sup>こ</sup>の人心<sup>しんちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>に怒<sup>いか</sup>りを帯<sup>お</sup>びて再<sup>また</sup>び問<sup>た</sup>ふ、「時刻<sup>じこく</sup>は幾<sup>いく</sup>時<sup>とき</sup>ぞ。今夜<sup>こんや</sup>三更<sup>さんかう</sup>子<sup>ね</sup>の時<sup>とき</sup>死<sup>し</sup>に給<sup>たま</sup>はん。此<sup>こ</sup>の人<sup>ひと</sup>おぼえず言葉<sup>ことば</sup>を厲<sup>はげ</sup>しくしていふ、「今夜<sup>こんや</sup>真<sup>ま</sup>に死<sup>し</sup>せば万<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>皆<sup>みな</sup>休<sup>きゆう</sup>す。若<sup>も</sup>し死<sup>し</sup>せずんば、明日<sup>みやう</sup>備<sup>ちなんち</sup>をゆるさじ。翁<sup>おん</sup>いふ、「貴君<sup>きくん</sup>明日<sup>みやう</sup>悉<sup>しつ</sup>なくば、来<sup>きた</sup>つて翁<sup>おん</sup>が頭<sup>くび</sup>をとり給<sup>たま</sup>へ。」<sup>3)</sup> (「白水翁」)

都賀庭鐘の翻案作品には、このような原話を模倣した個所が数多くある。従って、都賀庭鐘の初期読本の措辞用語に原話に類似したものや、或いは直訳による完全に同一のものも多く見受けられる。

#### 4.3 原話の構成の撰取と省略

孫文(先官平)は家に帰って、占い師の言ったとおりに三更に亡くなってしまい、その妻が百日後再婚するが、その後、死者の魂が判者の夢の中に現れ死因を訴えて、侍女の証言によって、共謀した犯人を見つけるという主筋は両者同一のものである。

「三現身包竜図断冤案」の題目が示すように、亡くなった大押司はその身を三回現している。一回目は、酔い醒めのスープを作る迎児の前に現れ、迎児に恨みを晴らしてくれと頼んだ。二回目は、銀子を借りるために押司家に行く迎児の前に現れ、迎児に銀子を与える。三回目は、王興と迎児がまた銀子を借りるために押司家を訪ねるが、押司の妻が迎児を家に泊ませた次の日、押司の妻と迎児が東岳廟に線香を立てている時、判官の像と化してその身を現した。大押司は、三回目に迎児と会い、しかも迎児に詩句の書いた紙を渡す。その詩句は次のようである。つまり、「大女子、小女子、前人耕来後人餌。要知三更事、掇開火下水。来年二三月、句已当解此」である。

「白水翁」では原話の二回目と三回目の身を現す場面を一つにまとめ、二回身を現すことになっている。先官平の二回目の身を現す場面について、以下の記述がある。

「我<sup>われ</sup>は是<sup>これ</sup>先<sup>せん</sup>官<sup>くわん</sup>平<sup>べい</sup>なり。此<sup>こ</sup>の袋<sup>ふくろ</sup>の内に<sup>うち</sup>金子<sup>きんす</sup>あり。備<sup>なんじ</sup>にあたへて貧<sup>ひん</sup>を助<sup>たす</sup>く。また此<sup>こ</sup>の紙<sup>かみ</sup>にうつしたるは、我<sup>われ</sup>が末期<sup>まつご</sup>の一句<sup>いっく</sup>也」と、地下<sup>ちか</sup>に投<sup>な</sup>げあたへて消<sup>き</sup>えうせぬ<sup>3)</sup>。(「白水翁」)  
その詩句の内容については説明していないが、後の国守の夢についての記述は、次のよう



である。

しかるに国守の或夜夢みと給ひしは、髪を披り、頭に井げたをいただきたる人、眼中血の涙を流し、一紙の願状を奉る。その文唯二句あり、要知三更事、可開火下水<sup>3)</sup>。

(「白水翁」)

国守はその意味の解説を懸賞するために、市門に掛けさせる。段介はこの掛札を見て、妻が先官平からもらった紙に書いてある詩句と少しも違わないことに驚いた。つまり、「白水翁」においては、第二回と第三回目の身を現す場面を一つにまとめ、原話の大押司の詩句もかなり省略して、「要知三更事、可開火下水」だけを残している。王興は妻の迎児が死んだ大押司と三回も会った事を包竜図に詳しく伝える部分である。包竜図は王興の証言によって、詩句の意味を解し、小孫押司夫婦が大孫押司を殺したと判定する。「白水翁」はこの部分の内容を殆ど省略し、案件審理の過程を大部分減らし、国守による案件についての分析はさほど詳しく描かれていない。そのため、「白水翁」において、この冤罪案の解決において、国守が包竜図のように才気を奮う場面はあまり多く書かれていないのである。従って、包竜図にあたる国守の裁断の英才ぶりに関する描写も殆どなく、公案小説の要素も薄れている。そのかわり、「白水翁」の怪異伝奇の味わいが色濃く感じられるのである。

#### 4.4 原話の改変

「白水翁」には、原話の趣向を改変した部分も見られる。例えば、大押司が入水した後の事を見てみよう。

「三現身」では、大押司が入水した後、押司の妻が隣人の「刁嫂、毛嫂、高嫂、鮑嫂」等と呼び起こして、事情の仔細を説明する段である。押司家の隣人たちも、普通の庶民ではない。鮑嫂の夫は押司と同じく県の役人であると推測できる。彼が朝県に出勤した時に、孫押司が相士李傑のところまで吉凶を占うことを目で見たとある。押司の妻がわざわざこれらの人々を呼び起すのは、自分の企みがばれないようにするためである。このような設定を通して、事件の真相が一層五里霧中になってしまう。つまり、この場面は後文の包竜図の高明な裁断を引き出すための伏線となっていると思われる。

これに対し、「白水翁」では、先官平が入水した後、近隣の人々が小瀬の騒ぎで夢から覚め、後から追いかけてきて、その様子を見て、小瀬を自家に連れて慰めるのである。小瀬の企みはこの字面からは読み取れない。原話での伏線の機能も「白水翁」では生かされていない。この段にまつわる相違点は両作品の主題の相違と関わっていると考えられる。

「三現身」は、題目の文字通り、「包竜図が三回身を現すことを手掛かりに冤罪案を裁断する」ことこそこの話の主題である。「卦を売る」いわば予言するというのは、この物語の中心ではない。「三現身」の怪異的な記述や紆余曲折とした筋立ては、庶民の読者層の興味をそそったのは当然であるが、以下の結末の語句が示すように、清廉潔白な裁判官包竜図の神機妙算を讃えているのである。

「白水翁」は、文字通り「白水翁の卦」、つまり白水翁の奇異とした予言こそが物語の中心的内容である。「白水翁」という名前の設定もこの物語の主題と深く関わっている。つまり「白水翁」の予言は、物語の始終を貫いている。物語は「権藤太が悪計は、人の戒めの古語となりぬ。」という結末の締めくくりに句で終わっている。「白水翁」は「権藤の悪計」を戒

める物語として、人々に代々言い伝えられているという意味である。つまり、「白水翁」は裁判物ではなくて、不義の男女関係を戒める物語である。原話の構成の簡略化の処理、原話の趣向場面の改変、そして「包竜図」に当たる「国守」像の希薄化という作者の翻案意識はすべてこの主題を作り上げていくための意図的な創意であるといえよう。

## 5. 『喻世明言』「陳従善」と『繁野話』「白菊の方」

1766年、都賀庭鐘の第二作の『繁野話』が刊行された。第一作の『英草紙』から、17年間の隔りがある。内容的にも、主として中国白話小説を忠実に翻案した『英草紙』と比べ、『繁野話』は、中国白話小説に依拠した度合が減少し、都賀庭鐘自身の創作する部分は増加している。都賀庭鐘は翻案方法を多様化させ、中国白話小説の筋立てに依存する姿勢も変えて、自己の創造力を生かして原話を改変するようになった。

『繁野話』第5話の「白菊の方」は、『喻世明言』の第20巻「陳従善」を原話にして翻案されたものである。都賀庭鐘は「陳従善」の内容を丹精込めて模倣しながら、意図的に取舍選択を行ったことによって、「白菊の方」の主題などの面において「陳従善」とは大きな相違点を生み出している。ここでは、「陳従善」と「白菊の方」の関連性を再考すると同時に、両者の主題の相違点を分析し、都賀庭鐘の翻案手法を論究してみたいと思う。

### 5.1 「陳従善」と「白菊の方」の梗概

#### (1) 「陳従善」の梗概

従善は妻の如春を従えて、広東南雄の沙角鎮巡検司の任に赴く。梅嶺の申陽洞の妖怪申陽公は仮に旅館を設けて如春をさらう。従善は公務を怠らないので、妻を捕われたまま任地に進む。申陽公が如春に意に従うよう強いるが、如春は貞節を堅持する。怒った申陽公は如春に賤業をさせる。従善は任地で賊人楊広を斬り、武威を振う。三年の任を終えた従善は紅蓮寺で妖怪に会い、斬りかけるがとり逃がす。従善は妖怪が紫陽真人を恐れていることを聞くと、真人の助けを求め、真人は法力で妖怪を捕える<sup>4)</sup>。

#### (2) 「白菊の方」の梗概

備中の三須守廉は妻の白菊を従えて、信濃掾の任に赴く。木曾山中の妖怪飛雲は仮に旅館を設けて白菊をさらう。守廉は信濃の国府に至って病と偽り、妻を探し求める。飛雲は白菊に奉公を強いるが、白菊は固辞する。怒った飛雲は白菊に賤業をさせる。三依道人の所で、守廉は飛雲と白菊に会い、飛雲に挑むが、その威力には抗すべくもない。白菊は飛雲の威力に敬意を払うようになる。結局、飛雲は滅亡の運となり、白菊は火の運、飛雲は金の運で、飛雲は命数が切れたため、雷公に撃たれて死ぬ<sup>5)</sup>。

### 5.2 原話の道教要素の捨象

「陳従善」の冒頭文では、男主人公陳従善の道教や仏教との関係について、「一心向善、常好齋供僧道（一心に善に向かい、常に僧侶や道士を招待する）」と明示している。また、赴任する前に、宴席を設けて、僧侶と道士を招待することにより、ストーリーが展開する。道教の紫陽真人は張如春には3年の災いを蒙ることができると予知した。そして大恵真人を従者羅童に姿を変え、陳従善夫婦を守らせるが、張如春が途中で羅童を追い払ってしまう。これは彼女に「千日の災い」をもたらすことになる。

中国の道教は、日本に導入されていないので、都賀庭鐘は「陳從善」の道教に関する描写をそのまま「白菊の方」に取り入れたら、恐らく日本の読者には受け入れ難いと考えたのであろう。従って、翻案において、都賀庭鐘は道教の描写を殆ど削除し、妖怪の神通についての描写を大幅に付け加えている。読者には小説の怪異性と新奇性に興味をもつように改変されたと思われる。

### 5.3 主題の転換

「陳從善」では、小説の主眼は、むしろ逆境にある男主人公陳從善の忠君報国、女主人公如春の貞潔堅守などの儒教教化を示すことにあると思われる。このような主題は日本人には受け入れ難いものなので、都賀庭鐘は「白菊の方」において、取捨選択を施し、原話の主題を切り捨て、人間の性を重視する主題に改めているのである。

男主人公は妻を妖怪に奪われた後、まだ赴任中であつたので、妻を探さず、引き続き任地に赴いた。それについて、両作品では次のように設定されている。

「陳從善」では、陳從善は就任した後、妻を探しに行ったことは一度もなかったが、従者等には頼んで、妻の行方を探しに行かせた。任期の三年間、陳從善は真面目に公務に勤め、好評を得る、任期が終わってから、ようやく自ら妻を探すことに全力を尽くした。

「白菊の方」において、男主人公守廉は、妻を奪われたまま任地に赴いたが、病気を口実にし、公務を副職に委ね、密かに任地を離れて、妻を探しに行くが、大変な苦労を経験した。

「陳從善」と「白菊の方」を比較すると、陳從善の妻への愛情は守廉ほど深くないようである。徳田武氏はこの点について、「粉本では、陳從善は如春を奪われたにもかかわらず、そのまま前行する。しかし、この設定は、男の不実と無気力の感を読者に与える。そこで庭鐘は、守廉を、任務を外にして妻を取り戻すべく木曾の峻険を駆けめぐるといふ、誠実で勇気ある男性像に改めている。」<sup>6)</sup>と指摘されている。

中国古典文学にはしばしば鮮明な政治性が満ちていて、忠君報国の思想は中国古代文学の衰えない主題の一つである。つまり、忠臣となるには、国家と朝廷の利益を一番優先し、個人の私情を後にしなければならない。陳從善が妻をさらわれた後の行動は、正に忠君報国の具体的な挙動である。彼は妻を妖怪に攫われても、公務を怠らず、まじめに自分の責任を履行するのは、朝廷からの期待に背かないためである。要するに、陳從善は純粋な忠臣である。このような描写は中国古典文学作品においてしばしば出てくる。「陳從善」だけのものではない。従って、妻を探しにいかない点だけで、陳從善は不実な男と断定するのはやや妥当ではないと思われる。実は陳從善は任期の三年間ずっと如春のことが気に掛かり、如春のことを思い出すたびに、「不覺涙下（思わず泣けてきた）」のである。しかも従者に如春を探しに行かせたこともあった。このような設定より、馮夢龍の忠君報国の儒教的教化を重視する主題がより一層表れているように思われる。

中国古典文学と異なって、日本古典文学はできるだけ、政治との関係を避けている。言い換えれば、日本文学には「脱政治性」という特徴がある。鈴木修次氏は『中国文学と日本文学』の中で、日本文学の「脱政治性」について論述している。中国の文人達は、伝統的に、政治との関連において文学の存在意義を自覚し、文学と政治を関連づけようとする意識が強い。それに対して、日本文学の伝統は、世界でもまれに見るほど脱政治の傾向を顕著に持つ

ている<sup>7)</sup>。

都賀庭鐘は翻案する時、「陳従善」の忠君報国の「政治性」の着想を一々洗い出し、政治性から離れた、人間の性を重視する主題に改変するために、全力で妻を探す守廉を造型する。都賀庭鐘の改変によって、「白菊の方」においては、夫婦愛を強調しているという人間の性への重視の主題が浮き彫りにされている。ここにも日本文学の「脱政治性」が反映されている。

要するに、都賀庭鐘は「陳従善」を踏襲しながら、原話の色濃い教化的要素を切り捨て、取捨選択しながら、新しく付け加えつつ改作した「白菊の方」は、日本の読者の趣味嗜好に符合するように人間の性を重視する作品に脱皮しているのである。

## 6. おわりに

都賀庭鐘は主に「三言」を創作の素材源として利用していたが、『英草紙』では原話を忠実に模倣しているのに対して、『繁野話』では原話に依拠しながら新しい創意が見られる。彼の巧みな翻案手法から当時の日本文人達の中国白話小説受容の実況をある程度垣間見られるのである。都賀庭鐘の巧みな翻案小説の手法は、江戸初期読本の世界を切り開き、読本の嚆矢的な存在として、その後の読本に欠かすことの出来ない大きな影響を与えていることに文学的意義があると思われる。

都賀庭鐘の後の読本作者である上田秋成、曲亭馬琴なども、中国白話小説の影響を受けて創作を行っていた。彼らも、「三言二拍」を原話にして、自己の主題を原話に融合させるという高度な翻案を達成しており、近世中期以降の散文学に、物語の構成、心理描写、教訓の導入等の方法を切り開いた意義と影響は極めて大きいものといえよう。

## 参考文献

- 1) 麻生磯次.『江戸文学と中国文学』.(1976.)三省堂 pp.64.
- 2) 馮夢竜編.嚴敦易校注.『警世通言』.(1956.)人民文学出版社 pp.14-24,161-174.
- 3) 中村幸彦.高田衛.中村博保校注.『日本古典文学全集 48・英草紙.西山物語.雨月物語.春雨物語』.(1973.)小学館 pp.127-147,148-180,218-229.
- 4) 馮夢龍編.許政揚校注.『喻世明言』.(1995.)人民文学出版社 pp.455-469,282-293.
- 5) 徳田武.横山邦治校注.『繁野話.曲亭伝奇花釵兒.催馬楽奇談.鳥辺山調絃』.(1992.)岩波書店 pp.46-69.
- 6) 徳田武.『日本近世小説と中国小説』.(1987.)青裳堂書院 pp.195.
- 7) 鈴木修次.『中国文学と日本文学』.(1987.)東書選書 pp.101.